

農業用水の多様な価値を次世代に伝える活動の研究

Activities which educates various value of agricultural irrigation and drainage system to next generation

○遠藤和子

ENDO Kazuko

1. はじめに

管理労力の脆弱化に対し、多様な主体の参加を得ながら、地域共同による農業用水等の資源保全管理が進められている。農業用水は、かんがい用水としての機能はもちろん、地域用水の面から見ても多様な機能を有している。そのよう多方面にわたる機能を広く伝えていくことにより、非農家や将来の担い手である子どもたちの理解向上および保全活動への参画が求められる。

先進事例の中には、農業用水を舞台にその多様な価値を見直し積極的に活かすことにより、地域住民と農業用水のつながりを取り戻し、結果として当該施設の保全管理につながっている事例がある。本稿では、水利施設の機能や歴史的な価値を、特に、将来の担い手である子ども達に学んでもらうことにより、水利施設の維持管理に対する理解を将来にわたって深めてもらう活動（以降、次世代育成活動）を行っている事例に注目する。いくつかの事例を対象に、その活動内容の整理を通して、次世代育成活動の効果と課題を考察する。

2. 方法

本稿では、先進的な取り組み事例として、21世紀土地改良区創造運動や疎水百選において優良な事例とされる土地改良区、または農政局HPにおいてユニークな活動を展開していると思われる土地改良区の中から複数事例を選び、それぞれに実施される次世代育成活動に対する調査を行った。方法は、活動の担当者、理事長、理事へのヒアリング調査、およびイベントに参加できた事例については、活動の参与観察を行った。

3. 次世代育成活動の内容

事例とした土地改良区A～Fは、表1に示す受益面積規模である。抱える問題は、施設の老朽化、維持管理の担い手不足に関するものが多く、高齢化や都市化など地域それぞれの事情を反映している。また、かつて農業用水を切り拓くことは豊かな地域社会形成の礎であったが、現在では人々の関心が薄れごみ投棄や苦情増加などの問題が発生している。

これらのことを背景に、事例の土地改良区では、水路開削の歴史を学ぶ、水路の機能や役割を学ぶ、あじさい植栽やホタル放流など水路への関心を高める活動へ参画するなど、さまざまに工夫した学習機会の提供を行っている。方法は、ジオラマや紙芝居を用いた見学対応または出前授業、バスツアーによる水路探検、施設見学等である。参加形態は学校の授業としての参加が多く、夏休みや土日等の親子企画などもある。活動主体は、多くは土地改良区であり、その場合、運営費の中から費用を支出している。農地水管理支払交付金を活かし協議会として運営している事例では、学校教育との積極的な連携がみられた。

4. 活動の効果と課題

調査からは、子どもたちが、農業用水の大切さ、先人の苦勞、施設管理の困難さについて理解を深めるとともに、ごみ投棄をやめるなど行動面に影響を現わしていることがわかった。また、いずれの土地改良区とも伝える側である大人達への効果が指摘された。例えば、「伝える」準備をするため事前研修を行うことにより組合員間の相互理解が深まった事例があった。さらに、授業参観等での発表を通じた親世代への伝播や、あじさい植栽等を通じた地域住民への幅広い啓蒙効果も認められ、中には、活動が地域全体のイベントに発展することにより、賦課金徴収率向上、ごみ減少などの効果がみられた。このように、次世代育成活動は子どものみならず幅広く効果を発揮することがわかってきた。

一方、活動の継続には、本務である施設管理以外に充てる人員や費用の確保が必要であり、中には活動が休止しているケースがあった。身の丈に合った活動内容とすることが肝心だが、小規模土地改良区の場合には、関係機関との連携などが活動継続の課題である。

表1 次世代育成活動の内容

Table1 Activities which the staffs of land improvement districts educates to children

土地改良区	受益面積 (ha)	抱える問題	次世代育成活動の内容	効果
A	6,796	土地改良区の合併、担い手の不足。施設規模が大きい。	水利施設のジオラマや紙芝居を作成。市内の小学生計500人ほどが施設見学に参加する。中学生の職業体験に協力。夏休み親子農業用水水源林現地学習会を開催。	担当者自身が土地改良区の歴史を勉強する機会になった。用水委員のお孫さんが職業体験に参加してくれた。
B	640	水利施設への関心の低下。	県の事業を契機に、水の探検隊を実施。バスで水利施設を見学したり、遺跡を訪問し水路開削の歴史を学んだりする。ホタルの飼育と放流を親子で実施している。	取り組みを通し組合員同士の理解が深まった。賦課金徴収に効果を発揮している。中学生へのアンケート調査ではごみ問題や環境問題への意識が高まる傾向を把握した。
C	496	受益農家の減少、土地家の増加。	学校田から頭首工までを遡る「田んぼの水・探検隊」を実施する。学校田における一年間の農作業を通し、用水と川とのかかわりを学ぶ。	田んぼや水利施設がいまひとつ自分たちのものと思えない『見えない壁』を取り除くことができた。10年前に参加した子が2013年度に再参加してくれた。
D	436	兼業化、後継者不足、施設老朽化。	紙芝居を用いた出前授業から用水開削の歴史を学ぶ。あじさいの里親、あじさい植栽活動。あじさいまつりのボランティアとして中学生が活躍。保育園児はテーマソングを歌う。	子どもたちは用水を地域の宝物だと考えている。子どもたちの地域活動への参加が多い。地元小学校がコミュニティスクール指定を受け、2014年より本格的に農作業等の学びが始まる。
E	340	施設老朽化、管理困難化と災害発生懸念	理事長が自ら地元小学生に、用水、ため池開削の歴史、重要性を出前授業により話をする。	子どもたちの感想文から農業用水や施設に対する理解が深まっていると感じる。当初あきらめていたが、児童の親世代への啓蒙にもチャレンジしてみようと思った。
F	94	施設の老朽化、高齢化、土地改良区に対する理解不足(苦情増加)、ごみ投棄。	地元小学生と、田植え、菜の花植栽などを行う。菜種より搾油、てんぷらづくりなどの体験も。小規模土地改良区であるため、人員、予算面で厳しく活動休止。14年2月に水源涵養林の植栽を実施。	全国で表彰されることにより内外の意識が変わった。子どもたちに農業理解、希望をもってもらいたいと、自身が思うようになった。水を守る役割は一番大事なはず。「名の売れない団体」から少し脱却できた。